

2010年2月18日 (T ADESKA)

Taller 3

「意味理解への語用論的アプローチ」

(Aproximación a la comprensión del significado por pragmática)

小川 雅美

第2外国語の教科書の1つの典型的な構成は、「会話テキスト—文法説明—練習問題」であるが、会話テキストを理解するには、文法と語彙の知識だけでは不足である。会話では、コンテキスト、言語使用者、言語使用がダイナミクスを成し、このダイナミクスから意味が次々に発生し、構築されていく。言語活動のこのような側面を扱うのが「語用論」のビジョンである。一方、教室での語学学習の活動は、「教室での活動の手段としての言語（媒介言語）を用い、対象としての言語（スペイン語）を学ぶ」という性格を持つ。日本人教師の授業では、教師と学習者が、活動の媒介言語として、互いの共通の母語である日本語を用いることになる。教師と学習者とのやりとりの主導権は教師に偏りがちで、学習者は「正しい答えそのもの」に発言が制限されがちである（発表者自身の授業も含む）。このことが授業進行において不可避であるとしても、学習者による意味理解のプロセスをも制限している可能性への注意は必要であろう。

課題は、言語使用というビジョンとそこからのアプローチを、学習者の中でどのように活性化させ、スペイン語表現の世界に誘うかということである。外国語の場合、学習者は経験的知識が絶対的に不足している中でスペイン語の形と意味を学ばねばならない。この場合にこそ、語用論的なビジョンを取り入れ、意味理解を言語活動によって内省的に（ただし頭の中だけで考えるのではなく、やりとりの中で）行っていくことが有効ではないだろうか。

発表者の提案は、学習者同士が、教室での媒介言語（日本語）をメタ言語として能動的に使用し、会話テキストの中で展開するコンテキストから発話が生まれる必然性、およびスペイン語の特定の形式として表出されるに至る必然性を話し合うことである。学習者は教え込みではなく、半ば自由な話し合いの多声性の中に生じる気づきから、学習の活動を進行させることができる。このような活動の中で、会話文のより自然な翻訳も、学習者自身が作り出せるであろう。また、2言語の相違により翻訳が困難であっても、メタ言語を用いた学習者の発話により、意味を理解しているかどうかを教師が確認することが可能となろう。教師は、グループ内の話し合いを聞いたり、質問を受けながら、文法ルールであれ、語用論的な観点であれ、必要と判断する知識を提供したりするのである。また、その話し合いにスペイン語のセリフをまじえることで、単なる発音練習ではなく、意味のこもったスペイン語発話の模倣ができると考える。

ワークショップでは、上記の内容に基づき、模擬授業として、参加者を4人程度のグル

ープに分け、福嶋(2009)『スペインの宝』(同学社)を用いて、会話テキストのディスコースができていく状況やプロセスについて話し合いをしてもらった。模擬授業の時間がやや不足し、発表者は、個々のグループの話し合いの内容をあまり正確にとらえることができなかった。しかしながら、教師同士の自由な話し合いでは、ストーリーの分析よりもテキストそのものを批判的に見るメタレベル的分析の傾向が窺え、この点は自分にとっては大変興味深かった。

ワークショップでは時間の関係で言及できなかったが、言語学が専門でないスペイン語教師の多くは、語用論を大学で学ぶ機会が少ない。これは、語用論という分野が、かつて「言語学のごみ箱」と言われ、語学学習のために必要な知識としてカリキュラムに位置づけられていなかったからであると発表者は考える。しかし、一旦教師としてコミュニケーションのためのスペイン語を教えることになれば、この知識は、文法規則では捉え難い言語現象を学生に理解させるのに役立つであろう。よって、今回のような機会に語用論の一端を紹介したことが授業に役立つならば幸いである。

今後、今回試みた方法をより明確で利用しやすいものにし、別の機会に教師のみなさんに紹介してさらなるコメントを仰ぎたい。